

2025 年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2025年度の学会賞が決定し、学術賞（単著部門）として牧田俊樹会員が、奨励賞（単著部門）として陳勝会員、奨励賞（論文部門）として石島健太郎会員ならびに岡部茜会員が選ばれました。

授賞式は、第73回秋季大会一日目の2025年10月4日（土）に同志社大学室町キャンパス・寒梅館ハーディホールにおいて、開会式に引き続いて行われました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



笹岡委員 和気会長 野口委員 牧田会員 今井委員 陳会員 山縣委員長 石島会員 平岡委員 岡部会員

◆ 学術賞（単著部門） 牧田 俊樹（立教大学）

受賞作：『「障害とは何か」という問いを問い直す

——「事実」から「有用性」に基づいた障害定義の戦略的・実践的使用へ』

（生活書院、2024年5月31日刊）



この度は、このような栄誉ある賞をいただき誠に光栄です。まずは、本書をお選びくださった審査委員の先生方に感謝を申し上げます。また、指導教員の田中耕一郎先生、論文の審査をして下さった先生方、本書に関係してくださった皆様、本当にありがとうございました。

わたしの行っている研究は、一般的に基礎研究・理論研究と呼ばれるものです。しかし、他の学術領域同様、社会福祉学領域でも、基礎研究・

理論研究が少なくなってきたと聞いています。これはすぐに役に立つ研究が求められるようになり、基礎研究があまり評価されなくなってきたからかもしれません。わたしの研究も例にもれず、今後役に立つどうかかわからない研究です。しかし、その役に立つかわからないという不確定性・偶然性も、研究の一つの魅力であると考えています。ですので、基礎研究・理論研究をする人たちが、これから増えていくことを願っております。

また、社会福祉学は学際性を謳っている学問であり、さまざまな領域の知見を取り入れることができる懐の深い学問であると思っています。しかし、民俗学・文化人類学・哲学・宗教学などの学問が参照されることはそれほど多くありません。社会福祉学の対象が必ずしも領域ごとに分かれているわけではない以上、さまざまな分野の知見がこれからはもっと必要になるのではないかと考えています。他の領域の知見を参照することは、専門外のため、正しい解釈ができていないか不安がつきまといます。しかし、それが考察を深めるものならば、それらを取り入れる勇気が必要であると考えます。こちらもまた、多様な領域の知見を参照した論考が多く生まれることを願っております。

最後に、改めて、このような学際的な基礎研究を評価してくださった本学会には、誠に感謝しております。これを機にこれまで以上に、読んで面白いと思っただけの研究をしていく所存でございますので、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

◆ 奨励賞(単著部門) 陳 勝(尚絅大学短期大学部)

受賞作:『当事者が語る「貧困とはなにか」——参加型貧困調査の可能性』

(北海道大学出版、2024年10月25日刊)



このたびは、日本社会福祉学会学会賞(奨励賞・著書)を賜り、誠にありがとうございます。まずは、審査にあたってくださった委員の先生方、そして日頃よりご指導・ご助言を賜っている皆さまに、心より御礼申し上げます。

受賞対象となりました拙著『当事者が語る「貧困とはなにか」——参加型貧困調査の可能性』は、貧困のなかで暮らす人々が調査研究の主体となり、自らの経験を語り合い、共に考える過程から生まれたものです。その意味で、本書は私個人の研究成果というよりも、当事者の方々との協働の積み重ねの成果であり、むしろ私自身が多くを学ばせていただいたと感じています。

参加型貧困調査という方法は、時間も労力もかかります。しかし、実際に集まり、語り合い、互いの経験を紡いでいくなかで、貧困の多様な側面が浮かび上がりました。そこではまた、困難な状況に置かれながらも人々が発揮している力やスキルが見えてきます。当事者の方々が、ときに意見の違いや迷いを抱えつつも、自らの言葉で「貧困」を語り、分析してくださったことが本書の土台となりました。本書が、貧困当事者をもう一つの「貧困の概念を構築する主体」として位置づけることを願っています。

今回の受賞は、調査に参加してくださった当事者の皆さま、出版や研究の過程を支えてくださった多くの方々と分かち合いたと思います。私はまだ力不足ではありますが、この経験を励みに、今後も当事者の声が社会に届くよう、周縁に置かれたさまざまな人々と協働しながら研究を深めていきたいと考えています。そして、同じ問題関心を共有する仲間と共に、より豊かな社会福祉学の発展に貢献できればと願っております。

◆ 奨励賞（論文部門） 石島 健太郎（東京都立大学）

受賞作：「重度訪問介護支給の地域間格差は、だれに・どこに・なぜ

あるのか—ALS患者の障害の程度と居住市区町村を踏まえた分析—」

（『社会福祉学』第65巻2号掲載、2024年8月31日刊）



このたびは奨励賞を賜り、大変光栄に思います。本研究は、ALS患者に対する重度訪問介護支給の地域間格差について、その規定要因を検討したものです。分析したデータは、患者会である日本ALS協会内部に設置された研究会で行われた調査において、会員である患者・ご家族の皆様の協力によって得られたものです。まずはお忙しい中で調査にご協力いただいた皆様、そして研究会メンバーの皆様に感謝申し上げます。

重度訪問介護の支給不足は、自立生活の現場にとってきわめてアクチュアルな課題です。その課題を素直に研究の問いとして取り組むことができたのは、社会福祉学の強みを感じる経験でもありました。私は社会学・障害学を主たる研究領域としており、とりわけ相互行為やその背景にある規範に関心をもちます。そのため、制度・政策についてはよく言えば禁欲的で、有り体に言えばすぐには役に立たないことを考えがちです。それ自体無意味とは思っていませんが、多少の不全感があることもまた事実ではあり、また私個人に限らず、障害学全体でも制度面への研究の必要性は指摘されています。その意味で、障害学における専門職批判の意義は十分に踏まえたうえで、社会福祉学の視角から補うべきものを補うという経験ができたことも、今後の自身の研究における糧になるだろうと思っています。

重度訪問介護支給の地域間格差をめぐる今後の研究の展望としては、拙論でも要因のひとつとして指摘した支給決定基準を片端から開示請求して集めることが第一歩になるように感じています。一方で、膨大な文書資料をどのように分析するかについては手探りな部分も多く、新しい技術の利用も念頭に、よく計画を練る必要があるでしょう。今回の受賞を励みに、今後も精進してまいります。

最後に、日頃から研究と教育の両立を支えてくださっている大学の同僚・学生の皆さんに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

◆ 奨励賞(論文部門) 岡部 茜(大谷大学)

受賞作:「「ひきこもり」経験をもつ若者からみる支援として提供される
共同生活の影響―共同生活型支援利用者へのインタビュー調査分析―」
(『社会福祉学』第65巻2号掲載、2024年8月31日刊)



この度は奨励賞に選んでいただき、身の引き締まる思いです。まずは、調査されるということの迷惑を被りながら、それでもたくさんのことを教えてくださった調査協力者の方々にお礼申し上げます。また、これまで実践や研究でお世話になった多くの方々、そして私の拙い論文を読み詳細な助言をくださった査読者の方々と、審査の労をお取りくださった審査委員の方々に礼申し上げます。

私は、ひきこもっている人を含めた若者層の生き延びるための手段や困窮の問題について調査、研究をしています。この論文は、共同生活型の支援の利用経験者のうち、ひきこもっていたと自らの状況を語った若者へのインタビューを検討したものです。この実践は、家族扶養を強く期待される日本で、別の生活も可能であることを実際の生活を重ねることで示しています。

若者との住まいを伴う実践は、わかりにくいものです。それゆえか、「地域資源」として都合よく行政から扱われることもあれば、反対に、怪しい・危ない施設だ、あるいは貧困ビジネスだなどと言われ遠ざけられ、やみくもに否定されたりすることもあります。確かに、若者を食い物にするような場にも、善き市民に訓練する施設にも、そして社会保障の普遍的整備の欠如を免責するものともなりうる危険性をもっています。それは、住まいをともなう他の福祉実践と少なからず共通していると考えています。私が見聞きした活動のなかでは、それでも、そうした危険性を回避できるように、日々をつくる実践は重ねられていました。そして、これらの場のなかで、これまで応答されてこなかった人々の、存在への、人としての応答を、あるいは応答の試みを、確かに見たようにも思っています。研究の仕事は、こうした人々の生存や抵抗の豊かさを少しでも言語化し、危険な方向に回収されぬように共に闘うことだと考えています。昨今、様々な場面で、生存権の扱われ方の、その耐えられない軽さに、たじろいだり、怒ったり、悩んだりする日々です。それへの抵抗を、微力ではありますがこれからも模索したいと思います。